

5月26日（月）～6月13日（金）に大阪市の公立中学校で教育実習を行った。初日には、全校集会での挨拶や先生方からの講話、校内見学があった。先生方からの講話では、校務分掌や教育課程について学習し、これらは学校の根底を支える仕組みであることが分かった。また、初日から担当学級で給食を喫食した。担当学級の生徒は、全員で素早く給食の準備ができており、非常に驚いた。緊張しながらも、給食の時間や昼休みに生徒と話すことができた。2日目・3日目は、主に授業見学や指導教諭との授業準備をした。授業見学では、担当学年だった2年生の英語科の授業を中心に見学した。この学年は、帯活動として入学当初から、英単語を覚えるペア活動を導入しており、この帯活動によって、生徒は授業の切り替えが円滑にできているように感じた。また、他教科の授業もいくつか見学した。それぞれの教科の工夫や生徒への発問の仕方、ICTの導入方法などを見学し、大学の講座で学習したことを体感することができた。さらに、担当学級の授業見学を通して、できるだけ早く生徒の名前を覚えるようにした。5日目に初めて授業を担当した。接続詞“if”の文法説明に関する授業だったが、緊張のあまり早口になってしまった。指導教諭からは、生徒の様子を見ながら落ち着いて授業するようにと助言を頂いた。また、授業の難易度が少し高かったため、生徒理解をして授業に反映させる大切さを感じた。

2週目以降は指導教諭の英語科の授業を全て担当した。1日に4コマ授業をすることもあり、実習期間中に担当した授業数は合計34コマだった。初めは緊張していたが、生徒と共に授業を創り上げることを意識して、楽しみながら授業をすることができた。2週目では、テンポを意識した間延びしない文法説明の授業を行うことに苦戦した。指導教諭や教務主任からは、生徒の興味を惹くために文法説明の導入に工夫することや、答え合わせの際にただ答えを提示するだけでなく、考え方が分かるように答えを提示することなどの多くの助言を頂いた。また、放課後は授業準備だけでなく、部活動や委員会活動の見学をした。放課後の活動では、生徒が主体的に活動する姿が見られた。

3週目には初めて道徳の授業を担当した。道徳の授業で難しかったことは、生徒の意見を引き出すことである。生徒が答えやすいような発問の仕方や生徒が興味を持つような例を提示することが重要であると感じた。また、14日目に研究授業を行った。授業内容は接続詞“that”の文法説明だった。文法説明の授業は自分の中で課題だったが、研究授業では、これまでの先生方の助言を参考にして、導入でクイズをしたり、生徒に発問しながら文法説明を行うことで、前回の授業より改善することができた。研究授業後の反省会では、先生方からのご講評があり、生徒のことを考えて授業資料の細部までこだわらなければならないことを学んだ。

教育実習を通じて、大学の講義だけでは分からない多くのことを学び、成長することがで

きた。今まで生徒側の目線で見えていた「先生」は、授業や教材研究だけでなく、休み時間の生徒との交流、放課後の部活動や打ち合わせ、生徒指導など、生徒のために多岐にわたる業務を担当しており、「先生」は当たり前の存在ではないことを実感した。また、この実習期間を有意義なものにできたのは、先生方が生徒の「主体性」や「授業で積極的に発表する姿勢」の土台作りをしていていたからである。自分が教員になった際は、その土台作りからすることを意識しなければならない。

実習期間は教材作成など大変なこともあったが、それ以上に生徒との交流や生徒の成長など、楽しいことや嬉しいことが多かった。実習前よりも「教員になりたい」と一層思うようになった3週間だった。